

## 被災地からの復興提言

福島県いわき市立湯本第二中学校

校長 澤井 史郎

私たち教員にとってかけがえのない子どもたちの多くの命が失われたあの日から、まもなく一年が経過します。行方不明の我が子を探し続けるご家族の様子が報道される時、時計の針が止まったままの人たちがいらっしやる現実  
に心が痛みます。

私が勤務する福島県いわき市でも 300 余名の方々が津波の犠牲になりました。残念なことにその中には 2 名の小学生と高校を卒業したばかりの 1 名の若者が含まれていました。

ある会合に参加した時、ご自分が勤務していた学校が津波の被害に遭った小学校の校長先生にお会いすることができました。当日、病気で休んでいた 2 名の小学生が亡くなったそうです。

「命を失う悲しみは、数の問題ではないのです。すべての子どもの命を守ることが学校の使命なのです」

とても重い言葉でした。定年退職を目前にした時に起こった震災、彼女（校長先生）の無念さを推し量ることは私にはできませんでした。

また、深い悲しみの中にあっても不屈の精神を持って子どもたちを励まし続けた先生方がいたことを忘れてはならないと思います。

地震発生直後、電話が不通になったため瓦礫の上を歩いて子どもの安否を確認した先生方、

避難所や仮設住宅に住む子どもたち一人一人と面会し、笑顔で話を聞き、一緒に涙を流し、励まし、生きる希望を与え続けた担任の先生方。

そして、自らも被災者であるにもかかわらず学校再開に向けて、休日も返上して教室を片付ける先生方。子どもたちは勇気づけられたに違いありません。

そして、誰もが待ち望んでいた学校再開。未来へ向けての光が見え始めた瞬間でした。子どもたちが再び学校へ戻ってきた日の先生方のうれしそうな顔は、今でも忘れることができません。

今回の震災では、私の学校もそうであったように多くの学校が避難所になりました。運営に先生方が協力したところも多かったようです。

そこで、学校は避難所とどのように関わったのか、そして被災地の教師がこれからはすべきこと等について話をさせていただきます。ご批判をいただければ幸いです。

### 【学校は避難所運営にどのように関わっていったのか】

本校は、2011年3月11日から5月22日までの74日間、避難所になりました。13日の午後には273名の津波の被害と原発事故の影響で避難を余儀なくされた方々をお迎えしました。中には老人介護施設や他の避難所での入所を断られた体の不自由な方々も含まれていました。

私たちは、避難所は単なる夜露をしのぎ、食糧が配給される場所とは考えませんでした。避

## 【仲間たちに支えられて】

難所とは、避難所を出た後に待っているより不自由な環境の中でも自活できるための鋭気と体力を養ってもらふ場所と考えました。

そこでまず行ったことは、生活場所を寒い体育館から温かい教室へ移動したことです。そして次の3つのことを実践しました。

1つ目は、避難民の皆さんの自立を促すために集団の組織とルールを作ったことでした。自治会長さんを互選し、小学生以上の皆さんには自分でできることを申告してもらい、自主的に仕事をしていただきました。毎朝、自治会さんが議長になり、その日の運営について会議を行いました。

2つ目は、避難民の方々が守ってこられた生活習慣や文化を絶対に壊さないことでした。お彼岸の日には、近くの葬祭場をお願いして仮の仏壇を作ってもらいました。それ以来、避難所が閉所するまで線香の煙は1日として絶えることはありませんでした。

3つ目は、互いの存在感と信頼感を作るためのコミュニケーションの場を作ったことです。震災でできなかった小学生の卒業式を避難民の方々と行ったり、毎月、誕生会を開き皆さんでお祝いしました。いつしか

「どこにも負けない避難所を作ろう」

という合い言葉が生まれていました。

3月が終わる頃には皆さんが自主的に活動するようになり、互いに助け合いながら生活するようになっていました。組織作りというと何か難しそうな感じがしますが、私たちが使った手法は学級作りそのものに他なりませんでした。

入学式を無事終えて、避難民の方々と共存しながらの新学期が始まりました。どの学校でもこの時期は忙しいはずなのに忘れもしない4月13日、那須塩原市の小学校の保護者、ALT（外国語指導助手）そして教員の皆さんが支援物資を届けてくださいました。

互いに初対面はずなのに同じ教員というだけでこんなにも心が通じ合うものなのかという連帯感、仲間が助けに来てくれた喜び、私は、初めて涙を流しました。その後も那須塩原市の小中学校からの支援は止むことがなく、現在も続いています。

また、昨年の夏休みには、同市教委主催の社会貢献活動で小中学校の先生方がいわき市を訪れ、強い雨が降る中で2日間にわたり瓦礫撤去や古着の仕分けの作業をしていただきました。

その後、参加された先生方は、所属する学校で子どもたちに被災地の現状を話され、それが子どもたちや保護者の皆さんの心を動かし、ある学校は南三陸町へ炊き出しに、ある学校は全校生徒に呼びかけて集めた支援物資を届けに再びいわきへと支援の輪が広がっていきました。

復興は、被害にあった地域だけでできるものではない。現状を伝える人たち、そしてそれに応える人たちがいなければ決してできないと思いました。

那須塩原市の先生方に教育の神髄を見せていただきました。本当にありがたいと思っています。

## 【今回の震災から学んだこと】

教師は、当然予定が変更になることをいやがります。常に「計画と実行」を好みます。

しかし、避難所では次に何が起こるのか予測ができません。計画をしている間に状況が変化してしまうからです。

今回の震災で学んだことは、「臨機応変」に対応することの大切さです。その時一番よい方策を考え、「臨機応変」に対応することと、「計画と実行」のそれぞれの長所を生かした教育がこれからは求められるのではないのでしょうか

## 【被災地の教師が

### これからなすべきこと】

私は、真の復興は物づくりと人づくりが被災者の皆さんによって完了した時に初めて達成されると思っています。物は、資金と材料があればある程度できます。

しかし、人づくりには時間がかかります。専門的知識も必要になってきます。では、誰がその役割を担うのか。私は、教員しかいないと思っています。何も新しいことをする必要はないのです。まずは、子どもたちを復興運動に参加させることです。

本校では生徒会でボランティアを募り、炊き出しの手伝いや地元の復興祭、遠くは東京で行われたいわきの物産展での手伝い等に参加してきました。次は保護者や地域との連携を深め、子どもたちが地域の復興のために活躍できる場を積極的に作ることです。

もう一つあります。教員が一市民として復興に積極的に関わっていくことです。学校の先生は子どもに勉強と部活動を教えていればよいと考える先生は多いと思います。

それに加えて今、教員には被災地の復興のために学校という領域を超えて一市民として貢献することが求められているのではないのでしょうか。

## 【避難所の役割】

私が担当した避難所は3月11日に始まり5月22日にその役割を終えました。その間、すべての避難所がそうであったように湯本二中避難所でも様々なドラマがありました。

273名の地震と津波で家族や家を失った被災者の皆さんを受け入れたときの混乱、十分に届かない食料、毛布そして灯油。余震が続く中で過ごす寒くて眠れない不安な夜。原発に関しての不十分な情報に翻弄され、他の避難所や親戚のところへ移動する人々。

そして本当は一番支援が必要にもかかわらず行き場所のなかった多くの人々。複数の避難所で受け入れを拒まれた要介護者の皆さんや車いすの皆さん。そして気がつけば避難所より劣悪な状況（風呂の水を飲んで命をつないでいた老夫婦）の中で生活していた地域の方々。

その様な中で私たち教職員が避難所の皆さんに提案したのは自治組織の結成、体育館から教室への移動、そして地域と生徒との共存でした。

自治組織を結成するにあたっては、自分で

きることをすること、一人一役を守ることを、の2つを大切にしました。子どもにも新聞配りやお年寄りのためにお茶を入れ、話をするという大切な仕事がありました。

自治会長さんを始め、各部屋の部屋長さん、教員、支所職員が毎朝会議を開き避難所の問題点やその日の予定等について毎日話し合いを行いました。はじめは教師主導で行っていた会議も徐々に避難所の皆さんで積極的に運営するようになり、いつしか

「どこにも負けない避難所を作ろう」

という気運が高まっていきました。

避難所生活の中で私が今でも鮮明に覚えていることが3つあります。

1つめは、避難所の皆さんで行った子どもたちのための卒業式でした。卒業証書もない花もない卒業式でしたが実に温かい卒業式でした。

2つめは、お彼岸の日に即席の仏壇に線香をあげ手を合わせる皆さんの姿でした。その日以来、仏壇には毎日線香があげられていました。

3つめは、月に一度の誕生会でした。4月の誕生会の時には、80歳のおばあさんが全国の皆さんからご支援をいただいた服で身を飾り、お化粧品をして満面の笑みを浮かべてろうそくの火を消しました。苦しくても乗り越えていこうとする皆さんの心に触れて感動した日でもありました。

避難所での最後の夜、自治会長さんを含む5人の皆さんと最後の食事会を開きました。彼はその時初めてお酒を口にしました。

私が73日間の避難所生活の中で学んだことは、避難所は単に避難する場所ではないということです。

避難所とは被災された皆さんの自立を促し、避難所を出た後に待ち受けている困難に打ち勝つための体力と気力を十分に蓄える場所であること。

避難所とは、避難所の皆さんが互いに協力して運営していく場所であること。だから決してわがままが通らない場所であること。

そして避難所とは、被災された皆さんの文化を決して壊してはいけない場所であること。

そんなことを学びました。最後になりますが、湯本二中避難所を支え続けたのは強い団結力と臨機応変に対応する本校教員の深い絆であったことをお伝えしてペンを置きます。

(2012年7月執筆)

